

清月記 SPECIAL対談 出村和子さんが語る「女性の生き方」

第2回



不安や孤独の中、「生きる力」を失いそうな一人ひとりの悩みを聴き、自らの力で乗り越えていける援助をする「仙台いのちの電話」の創設者の出村さん。これからの時代をどう生きていくべきか、伺いました。

「そのお金で何ができるかを考えます」



菅原 裕典
すがわら・ひろのり
1960年宮城県塩釜市生まれ。83年東北学院大学経済学部経済学科卒業。83年名古屋・中京葬儀社入社。85年3月、父・清一とともにすがわら葬儀社設立。89年仙台メモリアルサービス設立、社長就任。2000年エボックせんだい設立、社長就任。01年社会福祉法人無量壽会理事長就任。01年せんだい泉工フム放送取締役。01年(株)すがわら葬儀社社長就任。10年宮城学院中学校・高等学校父母教師会会長就任

多くの人の協力で「仙台いのちの電話」を開設

菅原 ご主人との出会いはいつだったのですか。

出村 実は東北学院大学の同級生なんです。私は助手で残り、彼は東京神学大学に行き、出会って12年目で結婚しました。私は45歳まで東北学院大学の教員だったのですが、どうしてもカウンセリングの勉強をしたいと、アメリカに行きました。

菅原 きっかけは。

出村 東北学院大学の助手の後、英語を教えたいと、常磐木学園中学校の教員になりました。その時自殺未遂の生徒と出会い、彼女から「私のことが心配というより、自分のことが心配なんですよ」と言われ、ショックを受けました。「私は子ども心が分からない」と。当時、アメリカカ

文化センターの留学生試験を受け29歳でコロンビア大学でカウンセリングの勉強をして、その後、プリンストン大学に留学中の彼と結婚、ハワイ大学を経て、仙台に戻ってきました。東北学院大学でカウンセリングを教え、またアメリカに行き、そして仙台いのちの電話を開設しました。

菅原 すぐに開設したのですか。

出村 実は、カウンセリングの養成講座を開こうと思ってたのです。当時のカウンセリング研究会で教えていましたが、東北にはいのちの電話がないから、その相談員を養成するためにいのちの電話を仙台で立ち上げてはどうかと言われたのです。それでさっそく、当時すでに開設されていた東京、京都を視察、ノウハウを勉強して1981年の4月に、亡くなられた秋保ま

どかさんとともに仙台いのちの電話のカウンセリングボランティアを募集しました。135人が集まりました。

菅原 運営が大変だったのではないですか。

出村 カウンセリング講座は参加費を取ってましたが、いざ運営するとなると何もないのです。そこで、知り合い佐藤利吉さんと笹気幸助さんから、「あなた方がやるのだったら、女性二人では大変だろうから」って、事務所などの援助を受けました。

私は、いつもお金があったら何が出来るかということを考えていました。ちょうど、東北学院大学の退職金がありましたから、それを使わないで、この運動にかけようと思ったのです。私の発想はいつもこうなのです。

菅原 素晴らしい発想、考え方ですね。

出村 そして、新聞社の協力などもあり、募金が集まり始めたのです。



清月記本社で

商品を開発して、受け入れられるほど楽しいものはない

菅原 仙台いのちの電話が東北初だったのですか。

出村 そうなんです。仙台の後、東北6県を歩き、盛岡、山形、青森、福島、秋田とできました。盛岡には1年間毎週、教えにも行きました。皆さんの協力で、何とかできた菅原 最初は大変だったでしょうね。

出村 当初は、仙台市花京院に青葉荘協会の牧師館を月1万円で借り、裸電球一つで、秋保さんと始めたのです。暖房もないし。それを見かねて、笹気さんが国分町のグランパレビルの屋上に事務所を作ってくれ、82年の11月に開設し

ました。その時は3ヶ月間、ほとんど真夜中までやりましたね。

菅原 いよいよ開設され、いかがだったのですか。

出村 待ちかねたように、電話が入りました。そのときのカウンセリング1期生が、今の事務局を支えていただいている常務理事の田中吟子さんなのです。今思えば、よくできたなあと思います。私が50歳の時です。

その時は、宮城学院女子大学や宮城教育大学、仙台白百合大学で非常勤講師を続けていました。59歳のときに、尚綱女学院短期大学から声をかけていただきました。

菅原 最初は、カウンセリング研究と普及を考えておられましたね。

出村 そうなんです。こりずに私の心の中では、何とかカウンセリングを広めたい



出村 和子
でむら・かずこ
1932年、秋田県湯沢市生まれ。親の仕事(ニチレイ)の関係で、宮城県石巻に。6年時仙台に。東北学院大学文経学部英文科卒業。米国T.C.コロンビア大学大学院教育学部およびハワイ大学院教育学部に留学、修士終了。東北学院大学助教授などを経て、社会福祉法人「仙台いのちの電話」を創設。尚綱女学院短期大学人間関係科教授、弘前学院大学大学院社会福祉研究科教授を歴任。DICT総合カウンセリング研究所を主宰、2009年12月閉鎖まで会長。前日本郵政公社東北支社嘱託カウンセラー、前仙台市教育委員長、前日本BPW連合会長などを務める。NHKふるさと賞、仙台市市政功労賞、郵政大臣賞、地方教育行政功労賞などを受賞。ご主人の出村彰氏は宮城学院女子大学前理事長。現在、弘前学院大学客員教授、いのちの電話理事長。

う夢がありましたから、DICTカウンセリング研究所を主宰して、講座を開きました。仙台いのちの電話と大学とカウンセリング研究所と、三足のわらじをはいていました。

菅原 その他にも様々な活動をされてましたね。

出村 BPWという働く婦人の会の全国連合会の会長も2003年まで。2000年から6年間は、弘前学院大学に毎週通っていました。

何をやり残しているのか整理してそのため健康を保つ

菅原 ところで、なぜカウンセリングを始めようと思ったのですか。

出村 当時は、金属バット事件が象徴するように、家庭問題が出てきたのです。アメリカでは配偶者の暴力でしたが、日本では、子どもが親に暴力を振るう、そして校内暴

力の時代だったのです。なぜ家庭内暴力がおこるのだろうか、カウンセリングの心を育てていければ、おそらく家庭もうまくいくのではないかと思ったのです。当時は、普通の家庭が、勉強する場がなかったのです。



昭和32年、東北学院大学卒業後、仙台市の常磐木学園中学校で英語の教鞭をとっていたときのもの

菅原 一家団らんが死語になっている時代ですね。

出村 子ども達の興味を持つ世界が外に広がって、家族が一緒になつてやるチャンスがなくなっていますし、叱るときにはきちんと叱らないといけません。長女は中学時アメリカのホームステイ先で、自分のことをすべてを自分でやることを覚えてきました。木曜日は全員で家の掃除をするのです。2男1女の子どもがおり

菅原 私どもも、儀礼文化の継承者として、今後とも頑張つてまいります。長時間にわたり、大変ありがとうございます。

菅原 私どもも、儀礼文化の継承者として、今後とも頑張つてまいります。長時間にわたり、大変ありがとうございます。

在りし日を偲ぶ「食のおもてなし」

仙台初の
通夜・法事専用会館

静謐なるやすらぎの空間

通夜・法事会館
仙台新寺斎場

清月記

☎0800-888-5777

<http://www.seigetsuki.co.jp/>